本堂と最後のお別れ

熊本地震の揺れにより、益城町だけでなく、熊本市など広範囲にわたり、寺院が被害を受けている。倒壊だけは免れたものの、柱が傾き、壁が破れ、修復不能となった寺院は「解体」という決断に迫られている。その一つである熊本市東区・崇専寺は解体を決め、5月18日に住職、門徒が集まり、最後のおつとめを行った。

熊本市・崇専寺　解体前 感謝のおつとめ

崇専寺の本堂は4月16日の本震で大きく傾いた。倒壊を防ぐために金属の突っ張り棒を2週間後に設けたが、修復は不可能な状態である。吉水隆秀住職(59)は、門徒総代会を開き、取り壊しを決めた。そして、門徒全員に手紙を送り、解体と、18日に最後のおつとめを行うことを知らせた。

吉水住職は「本堂は約130年前に建立されたもの。50年ほど前までは農繁期の託児所として開放していたこともあり、地域の皆さんの本堂として親しんでいただいた」と、大きく被災したその姿を寂しそうに見つめた。庫裏も大きな被害を受け、本堂に続く部屋は天井が破れ、本堂からの雨水が滝のように流れ込んでくるという。

坊守の次代さん(59)は「本堂を見るたびに『どうしよう』と悩み、途方に暮れて泣くばかりでした。心が折れそうになったとき、救われたのが門徒さんの励ましの言葉だった。皆さんも被災されているのに…」と目頭を押さえた。

次代さんに声をかけたのは岩本美代子さん(82)。「二人（住職、坊守）で心配してもダメ。門徒みんなで心配しないと。お寺はみんなの依りどころ、『なからと（無いと）ダメったい』」と一緒に泣いたという。

5月18日朝、64人の門信徒が集まった。本堂から運び出したご本尊を安置し、おつとめを行い、全員が焼香し、本堂への感謝の思いを表した（写真）。

吉水住職が絞り出すような声で挨拶した。「ご先祖が集い、私たちが集ってみ教えを聞かせていただいてきた本堂を壊すことは非常に心苦しいことです。しかし、周囲の安全の確保と将来を見据えて21日から解体することにいたしました。皆さま、どうぞこの本堂の姿を目に焼き付けておいてください」

目を潤ませた門信徒たち。門徒総代の野田亘さん(80)は「昨年、きれいに屋根を葺き替えた本堂がえらいことに。解体の費用も莫大で…」と肩を落とす。門徒の天野誠子さん(80)は「この本堂にはずっとお世話になりました。小さい頃は保育所になって村の年長者にみてもらい、今はご法座で。こんなことになってひどか」と残念そうだった。

吉水住職の長男・憲真さん(32)は「ご門徒さんもそれぞれが大変な状態なのに、お寺のことを心配してくださり、つながりの大切さを再認識しました。本堂を失うことはつらいが、私が下ばかり向いていてはいけない。父やご門徒と一緒に前に進んでいきたい」と語った。